

1. はじめに

1.1 経済活動

- 1.1.1 物質代謝の効率的・社会的な運営
- 1.1.2 商品売買としての経済活動
- 1.1.3 金儲けとしての経済活動
- 1.1.4 まとめ

1.2 経済システム

1.3 政治経済学／経済原論とは？

- 1.3.1 政治経済学／経済原論の対象
- 1.3.2 政治経済学／経済原論の方法

今回の課題

- 経済についてもっているイメージを整理して、クリアにする
- 経済原論でこれからどういうことをするのか、アウトラインを描く

キーワード

経済、生産、消費、物質代謝、現代社会、市場社会、資本主義社会

1.1 経済活動

1.1.1 物質代謝の効率的・社会的な運営

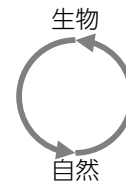
1.1.1.1 生物一般の生命活動

いつの時代でも、どの場所でも、人間は、自分に与えられている自然から自分にとって必要なものを生み出し、それを使い尽くし、やがては自然に返していく。新しいものを生み出すということを**生産** (production) と呼び、すでにあるものを使い尽くすということを**消費** (consumption) と呼ぶ。人間も他の生物と同じように自然の一部としてこのような自然のサイクルの中にある。このようなサイクルのことを**物質代謝** (metabolism) と呼ぶ。

生物学的には、このようなサイクルを行う器官は細胞である。そこで、分子生物学では、物質代謝は細胞レベルの機能と定義される。しかし、この定義では、多細胞生物の場合には、個体の生命の維持と物質代謝とは切り離されてしまう。たとえば人間の場合には、一つ二つ細胞が死んでも生物として死にはしない。これにたいして、この講義での物質代謝は、有機的な総体としての個体の生命の維持そのものである。

このような物質代謝を行うのは、なにも人間だけではない。どの生物も物質代謝を行っている。人間を含むどの生物も、物質代謝を通じて、自分のまわりの自然の中で個体としての自分を維持し、また繁殖して自分の種族を維持している。

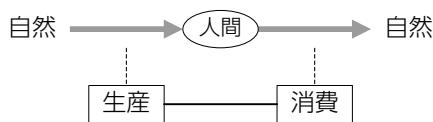
図 1 物質代謝



1.1.1.2 人間特有の生命活動

人間以外の生物の物質代謝においては、どこまでが生産でありどこまでが消費であるのかははっきりしない。けれども、他の生物とは違って、人間は生産と消費とを明確に分けている。

図 2 人間の物質代謝



消費の方については、人間はこれを効率的に行う必要はない。

たとえば、胃が正常に機能しているのに、わざわざ胃酸濃度を上げて効率的に消化するのはナンセンスである。むしろ、おしゃべりしながらゆっくりと——その限りでは非効率的に——食事を楽しんでもいい。もちろん、早食いしてもいいのだが、ともあれ、それは消費者の好き勝手に任されているのであって、効率性をもってよしとするのではない。

同様にまた、人間は消費を社会的に行いはしない。

たとえば、同じリンゴの同じ部分の果肉をみんなと一緒に食べることはできない。

これにたいして、公共的な財、たとえば（自宅の庭の道ではない）道路は多くの人が何回も使うことで消費される。しかし、この場合には、道路を横断する際に、社会をつくって横断するわけではない。多くの人がめいめい、同じ道路を個人的に消費しているだけである。（なお、資本主義的営利企業が運送のために道路を消費する場合には、もちろん、この消費は個人的消費にはならない。しかし、この消費は明らかに生産——場所の移動がその生産物であるような生産——であって、ここで問題にしているような、生産と区別される限りでの消費ではない。ピザ屋がピザを宅配し、客がそれを食べる場合には、客がピザを食べるといのが消費であり、ピザ屋の宅配は生産である）。

これにたいしてまた、（ジャイアンリサイタルではない）みんなで音楽ライブに参加する場合には、みんなでノって楽しむということが消費の本質的内容をなしている。ただしこの場合には、みんなで楽しむという消費の対象の一部分を消費者自身が自ら生産しているのである。ミュージシャンと観客とが共同で生産したライブ作品を消費しているのは観客個人である。

これにたいして、生産の方については、人間はこれを、次回に見るように労働を通じて、効率的に行う必要を感じ、実際にまたいくらでも効率的に行うことができる。

たとえば目の前にある草を本能のおもむくままむしゃむしゃ食べている限りでは、生産と消費とは分離していないし、効率性の向上は狭い限界内にある。これにたいして、自分が食べる（消費する）ホウレン草を自分で栽培する（生産する）ようになると、生産の方はわざわざやっている活動だから効率に行う——要するに、より少ない労働でできるだけ多くの、そしてできるだけ高い品質のホウレン草を生産する——必要性を感じる。また、効率化することができる。たとえば、ひなたに種を蒔くだけで、ひかげに種を蒔くよりも多くの、そして美味しいホウレン草を栽培することができる。なお、この例から分かる通り、効率性といった場合には、一定の労働量に対する生産物の量の増大だけではなく、生産物の品質の向上も含まれている。

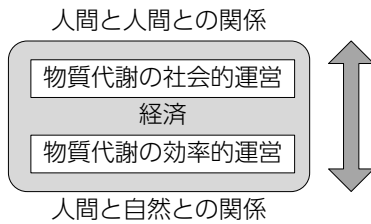
こうして、人間は、物質代謝を——動物のように本能のおもむくままに行うのではなく——、自分自身で、自分の意志で、自分のやり方で、行うことによって、合理的・効率的に運営することができる。したがって、人間は、この物質代謝に必要な労力・時間をどんどん減らし、また物質代謝のあり方をどんどん多様にしていくことができる。

上で音楽ライブの例を出したが、人間という高度に発達した生物の場合には、他の生物とはまったく異なる多様な消費を行っているのであり、しかもそれは人間として生きるということに不可欠である。従って、生物学の定義とは異なるが、この講義では、このような非物質的な消費も人間的生命を人間的なものとして維持するために必要な物質代謝の一環と定義する。

さらにまた、人間は、このような効率性の追求の延長線上で、やはり労働を通じて社会を形成し、社会の中でこの物質代謝を行っていくようになる。社会の中で物質代謝が行われるようになると、自分が生産する

ものと、実際に自分が消費するものとは一致しなくてもいいようになる。たとえば、どのような社会を考えても——商品交換が行われていようといまいと——、自分が消費するよりも多くの米を生産し、それを社会のメンバーに分配することができる。このように、人間の物質代謝には、人間と自然との関係だけではなく、人間と人間との関係も含まれているのである。

図 3 自然と社会とを結ぶものとしての経済



このように、人間は、物質代謝つまり生命活動を自分自身の力で運営し、これを通じて効率的に運営し、さらに効率化の延長線上に社会をつかって運営している。「人間が自分自身で効率的・社会的に運営している物質代謝（＝生命活動）」というのが**経済活動**（economic activity）の最も一般的な定義である。

英語の「economy」には「節約」という意味があるし、また一般に economize という動詞は「節約する」ということを意味する。それは、なにかの目的を達成する際に、労力を減らす、つまり節約するという、人間の経済活動の効率的な側面を表している。

また、日本語の「経済」は経世済民または経国済民の略語である。要するに、天下国家と人々の暮らしを、つまり社会を上手く治めるということである。それは、人間の経済活動の社会的な側面を表している。

以上の意味での経済活動は、なにも現代社会にだけあてはまるものではない。そうではなく、およそ人間が人間社会を形成し、その中で経済活動を行う限り、いつの時代にも（過去にも未来にも）、どんな社会にも、必ずあてはまるものである。そして、この定義では、人間以外の動物は経済活動を行っていない。

生物学では、たとえば蟻の集団生活のことを蟻の経済と呼んだりもする。人間社会と動物集団との違いは「3. 労働と社会」で詳しく見ていくが、この講義の定義では、蟻は集団をなしているだけであって社会をなしてはいないから、蟻は経済活動を行っていない。

しかし、それではいったいどうやって効率的にやっているのか、どうやって社会的にやっているのか、と言うと、そのやり方は、社会の性格が異なるのに応じて異なり、また特に前近代的共同体（pre-modern community）と現代社会（modern society）とでは質的・決定的に異なっている。

消費と生産との関係は？

消費とは、すでにあるものを使い尽くすということである。この点から見ると、物質代謝は、したがっておよそ生命活動とは、すべて消費だと言うこともできる。上では、人間以外の生物は生産と消費とを区別していないと言ったが、これは生産が消費に含まれているということである。もし消費しないならば、たとえば呼吸（酸素の消費）をしないならば、たとえば植物の場合には光合成（光エネルギーの消費）をしないならば、たとえば動物の場合には消化（栄養素の消費）をしないならば、そもそも生物は個体として生存できない。もちろん、種としても存続できない。だから、人間が他の生物と同様に生物である限りでは、人間の生活もまた消費そのものである。おぎゃあと産まれてから息を引き取るまで、寝ていようと働いていようと遊んでいようと意識を失っていようと、常に絶え間なく人間は消費を行っている。上で見たように、人間は生産と消費とを区別するようになるが、消費から区別されているようなこの生産もまた自己目的ではなく、消費という最終目的を実現するための単なる手段にすぎない。こうして、人間も生物だ（他の生物と同じだ）という側面においては、消費こそは生産を含む包括的な契機である。

それだけではない。生産とは新しいものを生み出すということである。だが、無から有を生み出すということではできない。生み出すということはすでにある有から新しい有を生み出すということであり、必ずすでにもわらにあるものを使い尽くしている。つまり消費している。たとえば、シャツを生産するためには、人間は、原料である布や糸、道具である針などを使い尽くしており、それだけではなく、そもそも自分自身の能力を使い尽くしている。『2. 人間と労働』で出てくる用語を使うと、生産は労働力と生産手段との消費である。だから、生産も

また一種の消費——これを生産的消費（productive consumption）と呼ぶ——なのである。

しかしまた、上で見たように、人間の生活を人間の生活として特徴付けるのは、つまり人間の生活を他の生物から区別するのは、したがってまた人間生活の発展の原動力になるのは、消費と生産とを区別するというのである。人間は自分が消費する対象を自分自身で生産する。こうして、人間は人間だ（他の生物とは異なる）という側面においては、生産こそは消費の性格をも、そして市場社会においては次に見るような流通の性格をも規定する規定的な契機である。人間は自分が消費するものの大部分を自分で生産するのだから、何が生産できるのかということが何が消費できるのかということを決める。もし自動車の生産が不可能であれば、自動車の消費も不可能である。そして、『3. 社会と労働』で見られるように、社会的生産における人びとの社会関係——生産関係——が、だれがどれくらい消費できるのかということを決める。たとえば、資本主義社会では、この社会関係において、大資本の所有者は多くを消費でき、派遣労働者の消費は少ない、というように。

なお、上で述べたように生産も一種の消費であるが、混乱を避けるために、この講義では、消費と言ったら、生産から区別される消費だけを意味することにする。

1.1.2 商品売買としての経済活動

「あっちのスーパーなら 10 円安いのに……。男の子って経済観念がないのね」（こまっしゃくれた小学生の A さん語る）

現代社会は、社会的富の圧倒的大部分が市場向けに生産され、市場において流通している**市場社会**（market society）である。

市場社会とは単に市場がある社会のことなのではない。そうではなく、市場が社会を支配しているような社会、社会になった市場である。

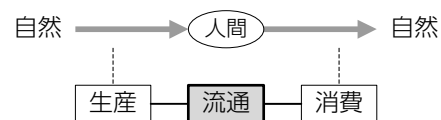
市場の発生そのものは、一部の文明の例外を除いて、文明の発生と同時期であるとさえ言える。たとえば、港・十字路など交通の要所に市が立ち、そこに人が集まり都市になる。多種多様な人びとによる商品交換は、モノの交換とともに、文化・宗教・思想等の交流をももたらす。やがては、都市は中央集権的な国家を形成する。こうして文明発生の典型的な事例をイメージすることができる。

しかし、前近代的共同体は市場社会ではなかつ

た。そこには市場はあっても、市場は社会のほんの一部しか支配しておらず、社会の圧倒的大部分を支配してはいなかった。たとえば、江戸時代の日本は、江戸・大坂などを見ると、ほとんど市場社会のように見える。だが、日本全国を考えるとそうではない。江戸時代の日本の人口の圧倒的大部分は稲作農民であり、彼らはほとんど市場に参加せずに、自給自足に近い生活を送っていた。

すでに述べたように、人間は社会の中で物質代謝を行う。それは、富が社会のさまざまなメンバーの手にわたっていくということの意味していた。市場社会では、そのようなプロセスは、市場の中で、商品売買——貨幣で商品を買ひ、貨幣と引き換えに商品を売るという交換——を通じて、行われている。すなわち、生産と消費とのあいだに**流通**（circulation）という社会的な過程が入り込んでいるのである。

図 4 市場社会における人間の物質代謝



物流と流通とを区別しなければならない。物流とは有用物の物理的な移動のことである。これにたいして、流通とは市場での商品交換のことである。より詳しくは、この流通は持ち手変換（私的所有権の移転）と形態変換（私的所有者の手中で一定の価値額が次から次へと異なる姿に変わるということ）との統合であって、この点については『5. 貨幣』で見ていくことになる。ここでは、以下の事例で両者の違いをイメージして欲しい。——土地の売買の場合には、この売買によって土地の流通が生じるが、しかし土地の物流は生じない。

そこでまた、市場社会としての現代社会をイメージするかぎり、「人間が市場の中で、商品売買を通じて、自分自身で効率的・社会的に運営している物質代謝（＝生命活動）」というのが経済活動の含意になってくる。市場では、社会的な富のコストが価格という形で比較可能になり、公開され、買い手は同じ数量・品質なら

ばできるだけ安い商品を選択し、売り手は他の売り手よりも高いと売れないから安く売らざるを得ない。いまや、労力の節約はお金の節約という形で達成されている。このように、市場社会では、市場を通じて人間は物質代謝を効率的に運営している。また、自分で自分と商品を交換するなんてことはできないのであって、市場での商品交換は他の人との社会関係をもたらす。社会が市場社会になっているということは原理的にはもはや完全な自給自足が不可能になっているということを意味する。あらゆる種類の商品が市場で売られているということは買い手のあらゆる欲求に応えているだけではなく、この欲求を刺激し、売り手はより多くの、また新しい種類の商品を市場に供給する。市場で売られている商品の質的・量的な拡大は社会関係そのものの拡大を意味している。このように、市場社会では、市場を通じて人間は物質代謝を社会的に運営している。

たとえば、飛行機にエコノミークラスがあるのをご存じだろう。この場合の economy は要するに「安価な」という意味だが、これもまたお金を節約しているからこそ安価なのである。

1.1.3 金儲けとしての経済活動

「俺たちじゃ経済活動をやっただよ。慈善活動やっせんじゃねーよ」(熱烈企業戦士のBさん語る)

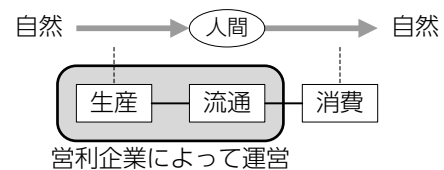
現代社会は単に市場社会であるだけではない。現代社会は、金儲けを主要な動機とする「資本 (capital)」と呼ばれるものが主役を演じる資本主義社会である。

資本主義社会とは、その名の通り、資本が主役となり、資本が原理となっているような社会である。だから、資本主義社会を定義するためには、本来は、資本とはなにかを定義しなければならない。だが、資本というものは資本主義社会のあらゆる所にいろいろな顔で現れるものである。このような資本の包括的な定義については、『7. 資本』で詳しく見ていくことになる。ここでは、資本が持っている顔の中の一つであり、資本の運動を現実に媒介している資本主義的営利企業をもって、さしあたって

は資本を代表させよう。

もう少し具体的には、**資本主義社会** (capitalist society) とは、商品の生産・流通の圧倒的大部分が資本主義的営利企業によって担われているような社会のことである。ここで、**資本主義的営利企業** (capitalist enterprise) とは、もっぱら営利という経済的目的のために設立され、この目的を達成するために多数の従業員を雇用しており (= 企業組織)、こうしてもっぱら営利活動をしている (= 企業活動) ような、そのような経済的主体である。

図 5 資本主義社会における人間の物質代謝



後に見ていくように、資本主義社会は市場社会を前提し、また市場は資本主義社会においてはじめて社会のすみずみまでその領域を広げる。しかし、市場社会と資本主義社会とは同じではなく、区別されなければならない。と言うのも、これから見ていくように、市場社会と資本主義社会とでは、社会の原理が異なるだけではなく、対立しているからである。たとえば、現代社会を市場社会としてとらえると現代社会は自由な社会として現れ、これにたいして現代社会を資本主義社会として捉えると現代社会は不自由な社会として現れる。

そこでまた、資本主義社会としての現代社会をイメージするかぎり、「資本主義的営利企業がカネモウケを目指して効率的・社会的に運営している人間の物質代謝 (= 生命活動)」というのが経済活動の含意になってくる。つまり、経済活動が営利活動になっているわけである。

『10. 労働生産力の上昇』で見ると、資本主義的営利企業は、カネモウケのための手段として、イノベーションをおこない、生産力を急速に発展させ、社会的富を急速に増大させる。このように、資本主義社会では、営利企業のカネモウケを通じて人間は物質代謝

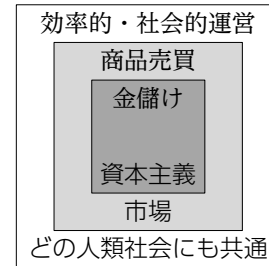
を効率的に運営している。

また、その過程で、資本主義的営利企業は大規模化し、たくさんの従業員を雇用する巨大な企業組織として現れるようになる。つまり、効率化を達成を通じて、企業は自らの内部に社会を生み出す。しかも、カネモウケのために、企業は世界中から商品を輸入し、世界中に輸出し、さらには世界中に自ら現地生産を行って市場を拡大する。つまり、企業は自らの外部に市場を拡大し、またすでにある市場を深め、こうして社会をグローバルに拡大するのとともにローカルに緊密にしていく。このように、資本主義社会では、営利企業のカネモウケを通じて人間は物質代謝を社会的に運営している。

1.1.4 まとめ

日常で「経済」とか「economy」とかと言った場合に、さまざまな意味を持っているのは、この「経済」という言葉が指す、経済という現実が重層的な構造になっているからである。この講義では、その構造を、単純に三つのレベルでまとめた。

図 6 経済活動の重層的構造



1.2 経済システム

このように人間は物質代謝を効率的に運営する上で、必ず社会を形成するようになる。経済活動が行われている社会的なシステムというのが**経済システム** (economic system) の最も一般的な含意である。自然は、人間社会の中で、人間によって、人間の欲求に合うように加工され、社会的に分配可能になると、「富」と呼ばれるようになる。したがって、この面から見ると、経済システムは、富をつくりだし (生産し)、富を使う (消費する) 社会的なシステムである。

ひとたび経済活動を行うようになると、人間は種族としては動物のような本能的な生活に戻ることはできない。そして、もし物質代謝を行わなければ、人間は生物として生きていけない。したがって、もし経済活動を行わなければ、人類社会は消滅してしまう。この意味で、経済システムはその他の社会的なサブシステム (政治システムとか文化システムとか) に比べて根源的な位置にあり、与えられた歴史的な社会においてこの経済システムをうまく機能させるような範囲内でその他の社会的なサブシステムのあり方が決まってくる。したがって、経済システムこそは、どの人類社会

においても、その他の社会的なサブシステムの性格に決定的な影響を及ぼす規定的な要因だと言えることができる。

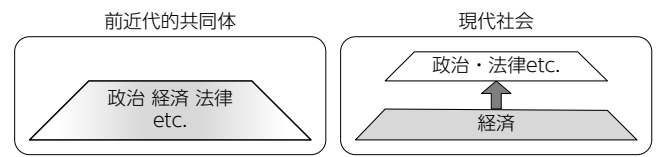
以前の前近代的な共同体においては、多かれ少なかれ経済システムはその他の社会的なサブシステムと不可分に混じり合っていた。

たとえば、江戸時代のお殿様は百姓から年貢を徴収して、自ら消費し、家臣に分配した (もちろん、現代国家と同様に、その一部は治水や住民サービスにも使われるのだが、あくまでも年貢徴収の目的は公共サービスではなく「お家」の維持だった)。つまり、年貢の徴収はお殿様の経済活動だった。ところが、年貢の徴収は経済活動であると同時に、法律に基づき、支払わない場合の武力の執行を担保した政治活動でもあった。

これにたいして、現代社会、すなわち資本主義的な市場社会においては、財貨・サービスの圧倒的大部分を、資本主義的営利企業という もっぱら経済活動だけを行う主体が、市場という もっぱら経済活動だけを行う

場に向けて生産し、そこにおいて流通させている。このような意味で、現代社会では、経済システムが他の社会的なサブシステムから分離している。こうしてまた、現代社会では、経済システムは、単に規定的な要因だと言うだけではなく、他の社会的なサブシステムの土台として現れている。

図 7 現代的な経済システム



1.3 政治経済学／経済原論とは？

1.3.1 政治経済学／経済原論の対象

政治経済学／経済原論は現代社会システム、すなわち資本主義的な社会システムを考察する。ただし、まさに現代社会システムが資本主義的な社会システムであるという、つまり経済システムであるという、現代社会システムの土台から、現代社会システムを把握するのである。

社会システムを構成しているのは経済だけではない。政治も文化も法律もそれぞれ自身のストラクチャー（＝構造）をもっている。しかし、前近代社会では、経済は政治とか文化とか法律とかから区別されてはいなかった。これにたいして、現代社会では、経済がその他の社会的なストラクチャーから分かれ、またそれだけではなくその他の社会的なストラクチャーの基礎をなすようになる。

すでに見たように、「経済」という言葉には三つのレベルの含意があった。このような経済の三つの層を統一的に把握するのが政治経済学／経済原論の課題である。この講義でも、最初にまず、人類社会一般に通用する経済の問題を考察する。次に、現代社会が市場社会としてもっている側面を考察する。その後で、現代社会が資本主義社会としてもっている側面を考察する。

1.3.2 政治経済学／経済原論の方法

1.3.2.1 システムをトータルに把握する

政治経済学／経済原論の方法で重要であるのは、第一に、システムをトータルに、つまり一つの全体をなすものとして、把握するということである。

われわれの目の前にある経済的なカテゴリー（たと

えば商品とか、利子とか、企業とか、労働者とか）はたがいに関連しあっており、経済システムはこの関連の全体である。政治経済学／経済原論は、経済システムをこのような全体として、トータルに把握する。こうして、経済原論は、それらのカテゴリーがどういう関係にあるのか、どういうふうに関連しあっているのかを教えてくれる。

“トータルに把握する”ということとは、“なにからなにまで全部、把握する”ということではない。個々の産業の問題とか地域経済の問題とかについては扱わない。細かい問題とか特殊問題とか応用問題とかについては扱わない。経済原論は、基本的な、一般的な問題しか取り扱わない。たとえば、金融の細かい問題については金融論にまかせるし、日本経済の細かい問題については日本経済論にまかせる。

1.3.2.2 システムをラディカルに把握する

政治経済学／経済原論の方法で重要であるのは、第二に、システムをラディカルに、つまりその根本から、発生的に、把握するということである。

社会システムは、大昔に一度できあがったらそれで終わりというものではない。そうではなく、毎日まいにち、いや毎秒まいびょう、社会システムが生みだされているのである。そして、社会システムを生みだすのは、結局のところ、人間の活動である。したがって、“根本から把握する”ということとは、人間がどのようにシステムを生みだしているのかを、把握するということである。次回以降に詳しく見るが、人間の活動の中で、このような、システムの根幹を生みだす活動が労

働である。労働はモノを生み出すだけでなく、それ
を通じて社会を生み出し発展させる。だから、一言で
言うと、“根本から把握する”ということは、システム
把握の出発点に労働をすえるということである。

2022/08/17 17:55 最終更新